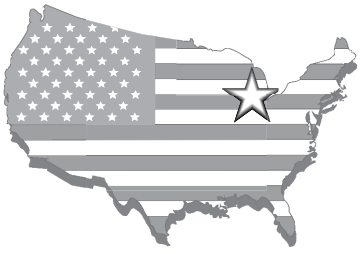
Tokyo, JAPAN

アメリカ留学自己変革記
(5)

早稲田大学政治経済学部４年
宇野　真弘



Wisconsin, U.S.A.

2008 年 9 月から 2009 年 6 月まで、大学の交換留学プログラムを利用して、ウィスコンシン州のローレンス大学に留学しています。この留学の目的は「自己変革」を起こすことです。その体験を記していきます。

こんにちは。今回は、交換留学プログラムの終了に伴い、自己変革という目的のために努力してきたローレンスでの生活を振り返りたいと思います。私は夏からインターンシップを予定しているので、ここでの反省は、インターンでの自己変革において生かされるのと思います。

1.「視野の拡大」は実現できたか?

ものごとを複数視点から考えられるようになること。これが留学の第一の目的でした。留学生活を通して、「なるほど」と思うような様々な視点に出会いました。けれども、それらの視点を身につけるまでには、今後の継続的な努力が必要なようです。

留学前は、様々な視点をできるだけ多く知ることが、自分の視点を増やすことにつながると考えていました。ところが、実際は自然に身につくほど簡単なものではないと気がつきました。例えば、政治専攻の学生対象の合宿で、「石油資源は近い将来枯渇するため、代替燃料へと今すぐ移るべきだ」VS「30 年は石油資源が持つのですぐにシフトする必要はない」というディベートがありました。そして、石油資源賛成派の主張の中で、石油からのシフトによって途上国の開発が遅れることになるため、すぐに代替燃料に移るべきではないという議論がありました。私も含め多くのジャッジは、それに納得していたのですが、一人のジャッジはその議論について次のような質問をしました。長期的な視点で見たときに、環境への影響を考慮した経済発展のモデルが求められることになるなかで、地球温暖化へと導いた先進国の経済発展モデルをそのまま真似ることが、途上国にとって果たしてとるべき道なのかというものです。これは、経済発展のみを考慮した既存の視点とは異なる、未来を見据えた環境・経済的な視点からの重要な質問でした。私はこれになるほどと思わされたわけですが、実はこの視点は、早稲田大学でのゼミで私が出会ったことのあるものでした。「商社に入って途上国のインフラを整えたい」と話した学生にたいして、「これまで先進国が歩んできた発展のモデルをそのまま途上国に移すことがいいことなのか考えておきなさい」と教授が指摘したことがあったのでした。このように、新たな視点に出会うことがあってもそれが自分のものとはなっていなく、後に誰かが指摘してからそのことに気づくことがよくあったのです。

そこで、そういった視点を実際に身につけるには、次のような努力が必要なのだと感じます。まずは、新たな視点に出会ったとき、その視点からの思考を自分なりに前進させることです。上記の例で言えば、ゼミで出会った時点で、途上国のインフラ整備に関する議論を発展させるのです。先進国が経た道をたどるべきか、環境を考慮した新たな発展のモデルを模索するのか。そうすれば、途上国の経済発展と環境問題に関する同じような問題を目の前にしたとき、すぐにこのケースを思い出すことができるからです。またその後、それら複数の視点を常に応用することです。それにより、複数視点からのアプローチがパターンとして身につくようになると思うのです。こうした努力を続けていくことで、今後、視野の拡大を実現していきたいと考えています。

2.「積極性の向上」は果たせたか?

私の二つ目の留学の目的は、積極的に発言できるようになることです。躊躇いがないと言えば嘘になりますが、貪欲さを持って自分の意見を述べることができるようになったと思います。

例えば、秋にとったフレッシュマン・スタディーズのクラスでは、手を上げる際、「ああ、こんなこと聞いたら、他の学生にばかだと思われるかもしれない」と思うことが多々ありました。留学前、どう思われていてもいいからとにかくトライしようと決めていたにもかかわらず、手を上げる直前になって怖気づくことが多くありました。